北海道のミズバショウの分布と現況

外 山 雅 寛

はじめに

ミズバショウは北海道にはごく普通に見られる水生植物であるが、近年ではそれらの自生地が開発の犠牲になってしまう例があちこちで起こっている。

そこで、普通種といえどもその分布を明らかにして、今後それらを見守っていくことの必要性が痛感される。

以下、本報告で、その分布地と北海道の現況について記録しておきたい。分布地は筆者が自からの足で歩いて確認した所と文献上から確認したものを含んでいる。分布実証のための標本は採取していない。

北海道におけるミズバショウの主要分布地

道立厚岸自然公園（アカエゾマツ林下）・石狩町マクンベツ湿原・札幌郡広島町開拓記念公園の湿地・同広島町東部地区ＮＴＴ裏の湿地・野幌原始林林内大沢公園の湿地・中山第１湿原（札幌市と喜茂別町にまたがる）・中山第２湿原（喜茂別町）・長万部町静狩湿原の１部・新篠津村各所の防風林内・石狩郡当別町中小屋赤沢・室蘭市陣屋町室蘭市民族資料館の裏の湿地・北桧山町浮島公園内うぐい沼（北桧山駅東南部、うぐい沼の周囲は遊歩道あり）・チミケップ湖周辺部・定山渓・新冠・知床半島知床五湖・芽室町伏美湿原(立入禁止)・狩勝峠・網走管内藻琴湖・美深松山湿原・蘭越町コックリ湖（国定公園）・上川郡当麻町（山地の湿地）・無意根山上部大蛇ケ原・白老町ポロト湖・アポイ岳の湿地・オンネトウ（道東アカエゾマツの林下）・大沼・小沼・道道当別浜益線沿いの至る所・浜益村大字実田村・苫小牧市ヨコスト湿原跡地・サロベツ湿原の１部・雨竜沼・根釧原野・遠浅・オロフレ・能取湖・クッチャロ湖・登別市・富良野原始ケ原湿原・上川町浮島公園・風連望湖台自然公園・利尻島南浜湿原・札幌市大谷地コナラ林内（学術保護地区に指定、大谷地団地の西部に位置）・江部乙町（江部乙駅近くの無名の沼）・旭川市神楽岡公園・網走管内網走湖岸（呼人と女満別との中間地点附近の網走湖岸一帯に広がる）・江別市内の沢地・札沼線の線路沿い・芽室町渋山７線新嵐山（学術自然保護地区）・帯広市拓成（学術自然保護地区）・狩場山（登山口より４km以上のダケカンバ帯）・道北メグマ沼・滝ノ上浮島

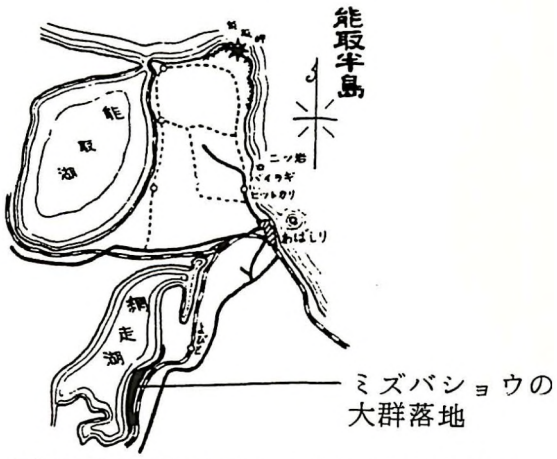
以上主要な産地のみを記したものである。

日本最大のミズバショウ群落地

北海道は、ミズバショウに関する限りでは最も豊富な地域である。本州では尾瀬湿原の群落が全国的に知られ、多くの人々がそこを訪れる。しかし、日本最大のミズバショウの群落地は先に挙げた自生地のうちの網走湖畔のミズバショウ群生地である。

1960年、読売新聞に連載された舘脇操氏の記事－北海道の植物（９）の中に網走湖畔のミズバショウに関する文が見えるので引用したい。－「前文略……北海道の早春の花として忘れることのできないものはミズバショウである。ミズバショウといえば、私は網走湖畔を思わざるを得ない。女満別から呼人にかけ８キロばかりの間、ハンノキ林の下に咲くミズバショウ群落ほど壮麗なものはない。おそらく日本で一番大きな群落であろう。これを車窓からながめ得るのであるからまことにすばらしい。

日本最大のミズバショウ群生地の概念図



「北海道の国立公園と景勝地」より引用図
（一部修正加筆）

網走の港から流氷が去るのは3月中旬、湖の氷のとけるのが4月中旬、春は空から、そして海から湖に、そしてさらにミズバショウによって地上にかろやかな足を運ぶのである。この前後、白鳥の動きが活発となり、大陸への最後の一休に彼等はトーフツ湖に群れて、その翼をそろえて休める。春動きはじめるころのここらあたり、オホーツクの風物誌は日本で最も閑寂優美な動きを見せる。」

ミズバショウ群落地の北海道現況

湿原では低層湿原に見られるもので、植生上では様々な状況が観察される。単独の群落、またある時はミズドクサとの組み合わせ・イワイチョウとの組み合わせ・エゾノリュウキンカとの組み合わせ等が見られる。

北海道は確かにミズバショウ群落が最も多い地域である。しかし、現在より30年もさかのぼって当時の北海道を振りかえってみると失われたミズバショウ群落は相当な面積を占めるものと推定される。

かつて準農村で、急速に都市化した所では特に著しく都市の中にわずかに群落が残されている場合がある。札幌市の大谷地や札幌郡広島町はその例として挙げることができ、かつてはかなりの群落があった地域である。旭川市にある神楽岡公園にもミズバショウの群落が見られるが、著者が子どものころは街はずれのさびしい所であった。今では都市の中の公園となっている。

現在問題になっているミズバショウの大群落地としては、石狩河口に近いマクンベツ湿原を例として示すことができる。河川敷内の湿地（底質は重粘土）で大群落が見られ、堤防の拡幅工事によって群生地がかなり埋立てられることになるが、自然保護団体の反対により、その一部分（埋立て部分）の自生株を他の場所に移植することが検討されている。昨年自生地を踏査してみたが生育状態は極めて良好で、充実した株がぎっしりと根を下ろしていた。その中で人影を見たが、自生地内で堤防拡幅工事のための測量をしていたようである。この地は上流から豊富な栄養が運ばれ蓄積された土質であるゆえにミズバショウにとっては最もお気に入りの自生地であって、これ以上の代替移植地というものは近くには認められない。そういう代替地があるとしたならば、そこには既にミズバショウの自生が見られるはずである。

しかし、他の都府県には見られない比類なきミズバショウ王国はやはり北海道である。都会に住んでいても、車を少し走らせると容易に群落地に行き着く。札幌市から近い所では当別－浜益の道道沿いや沢地等に数々の群落を見ながら自然を満喫することができる。ことにこのあたりは5月20日ころともなれば、エゾエンゴサクやオオバナノエンレイソウが咲きみだれ、沢には無数のミズバショウとエゾノリュウキンカの見事な様を観賞することができる。

あとがき

本稿は北海道におけるミズバショウについて、ほんの概況を記録したものに過ぎません。確かに北海道はミズバショウの群落には恵まれていますが、開発の波にもまれながら、今後も自生地が失われて行く恐れがあります。それらが消失して行くことのないよう見守っていきたいものです。

参考文献

舘脇　操，1947．北国の花．柏葉書院．
舘脇　操，1961．北海道の植物．北海道自然保護協会（「読売新聞」連載記事）．
北海道景勝地協会，1936．北海道の国立公園と景勝地．
朝日新聞北海道支社報道部，1987．北海道自然100選紀行．北海道大学図書刊行会．
氏家　耕，1986．網走市周辺の植物．網走市立郷土博物館友の会．
北海道自然保護協会，1985．北海道自然環境情報－自然保護年報－
松尾栄他，1985．当麻町野生植物図鑑．当麻町．
細川音治，1990．阿寒・摩周の植物．北海道新聞社．
中林昭正，1976．北海道根室の花．
環境庁，1981．日本の重要な植物群落　北海道版．
加藤多一，1989．手をかけない魅力－メグマ沼を歩いてみた．「北海道の自然」No.28，北海道自然保護協会
宗像英雄・林幸男，1962．松前半島植物誌（第1報）．函館植物研究会．
横山春男，1951．十勝植物誌．帯広営林局．
宗像英雄・池田忠男，1960．恵山植物誌．函館植物研究会．
北海道生活環境部・江別市市民部，1977．東野幌湿原生態調査報告書．
環境庁，1984．釧路湿原保全対策緊急調査報告書．
西田達郎・辻井達一，1983．オホーツクの植物．北海道

新聞社
荒沢勝太郎，1984．知床の草木花．北海タイムス．
原　松次，1990．札幌市東部低地帯の植物．「北海道の自然と生物」№2．
辻井達一，1964．昭和38年度サロベツ総合調査中間報告書－生物部門．北海道開発局．
辻井達一，1971．昭和45年度サロベツ総合調査中間報告書－生物部門．北海道開発局．
北海道開発局，1963．北海道未開発泥炭地調査報告書．
田中瑞穂，1975．釧路湿原総合調査報告書．釧路市立郷土博物館．
伊藤浩司，1969．北オホーツク沿岸文化財調査報告書．北海道教育委員会．
伊藤浩司・梅沢　彰，1973．雨竜沼湿原の植物社会－北海道高地湿原の研究（II）．日生態誌　Vol.23，№1．
橘ヒサ子・伊藤浩司，1981．サロベツ原野の植物生態学的研究．北海道大学「環境科学」3（1）．

北海道のエゾノミズタデの新産地

外　山　雅　寛

はじめに

1989年5月23日、著者は苫小牧市の口無沼（くちなし沼）及びナカイチ沼の2池溏を踏査した。

北海道の沼はかなり歩いたつもりであるが、これまで踏査した地でエゾノミズタデ *Polygonum amphibium* L. を見たのは「口無沼」が最初である。北海道では比較的少ない水草であるが、大滝末男氏（1980）は北海道分布として十勝（ホロカヤン沼）・釧路（塘路湖）・天北地方を示されている。

他の文献を探索してみると、氏家耕氏（1986）は小清水町涛沸湖、網走湖にエゾノミズタデが分布することを報告している。さらに、伊藤浩司氏（1969）は、本種の産地として道北の浅茅野・ポロ沼を挙げている。以下、今回確認されたエゾノミズタデの新産地を報告したい。

口無沼の位置

国土地理院25,000分の1地形図－「樽前山」の錦多峰川（ニシキタップ川）の上流を越えた位置にあり、沼の水はけ口がないので「口無沼」の名がついている。

案内板によると、昭和48年にレクリエーションの森（風景林）に指定されたことが記されている。

水質測定結果

測定日：1989．5．23，Time：13：30　Air Temp.：28℃，Water Temp.：23℃，pH：8.6，DO：14.2（東亜電波工業製アクアメーター使用）

苫小牧市のほとんどの池溏は弱酸性を示しているが、本池溏は上記のように強アルカリ性を示しているのが注目される。

口無沼のエゾノミズタデの植生状況

生育状態は非常によく沼岸に群生している。他の水生植物は少なく、ヨシ・ホザキノフサモ等も見られた。

pH値が高いので、タヌキモ類は全く植生が認められなかった。当産地では分布実証のための標本は未採集のため、折を見て標本作成の予定である。

《附　記》

本種にはその陸生型 *Polygonum amphibium* L. form. *terrestris* Kitagawa が知られているが、近時、原松次氏（1990）が札幌市より確認されている。

参考文献

1）大滝末男・石戸　忠（1980）：日本水生植物図鑑．北隆館
2）氏家　耕（1986）：網走市周辺の植物．網走市立郷

苫小牧市口無風景林入口の案内板（あまり知られていない。案内板も立ったばかりのものらしい。）